

3種類の単称思想

——既存説の整序による単称思想の複数様態の存在の明示化——

須田 悠基

<単称思想>概念には元来ラッセルが提唱した<見知り>と呼ばれる成立条件が課されていた。しかしながら、直接指示の理論の発展以降この条件の必要性の有無、そして<見知り>の正確な定義ですら各論者に大きな意見の相違が生じており、これにより単称思想をめぐる理解も混乱した状況となっている。本稿で筆者は見知り条件を保持する立場と不要とする立場双方を検討し、単称思想の正確な定義、成立条件を明瞭化することを試みる。結果として単称思想の成立条件を最も適切に示している立場は見知りを不要とするカミングの記述的心的ファイル説、あるいはジェシオンの認知主義であり、単称思想全体の定義としてはラッセルが課す条件は誤りであるため代わりにクレインによる定義が採用されるべきであることが主張される。ただし記述的心的ファイル説及び認知主義が示すのは単称思想のミニマルな成立条件であり、見知り等の追加条件を満たす事で成り立つ別様の機能を果たす限定的な単称思想がさらに2種類存在することが同時に示される。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、単称思想と記述思想の区分が提示され、これについてのラッセル、クレインそれぞれの定義が示される(1節)。その後ラッセル的定義に基づく単称思想と直接指示論の関わりが述べられる(2節)。そして単称思想の成立条件についての主だった立場である言語的見知り説、因果見知り説、道具主義、そして認知主義及び記述的心的ファイル説がそれぞれ概観され、これら立場への異議が確認される(3節)。続いて各立場への異議の検討が行われ、その帰結としてラッセル的定義ではなくクレインの定義が単称思想全体の定義として採用されるべきであり、単称思想のミニマルな成立要件には見知りや単称命題が要請されないことが示される(4節)。しかし同時に、単称思想にはミニマルな条件に加えてより厳しい条件をも満たした際に成り立つさらに二つの様態があり、この特殊な単称思想の成立条件としてラッセルの定義を保持する事が可能であると主張される。最後に単称思想の成立条件を最も上手く捉えている立場が記述的心的ファイル説であることが確認され、これに基づく最終的な単称思想の成立条件と、記述思想との新たな区分が整理される(5節)。

1. 単称思想と記述思想

我々が対象について抱く思想⁽¹⁾には、2種類のものがあると言われる。一つは記述思想と呼ばれる思想であり、もう一つは単称思想と呼ばれる思想である⁽²⁾。前者は「庭で一番大きなバラ」などの記述を偶然的に充足する対象に関する思想で、世界の対象について思考しているのではあるが、特定の対象を念頭に置いてはいないような時に抱かれている思想である。他方の単称思想は特定の単一の対象を念頭に置きながらその対象について思考する際に成り立つ思想である。言語哲学において単称思想が重要視される理由は、何よりも主体への信念の帰属を表す信念文の異

なる解釈を把握するのに有益だからである。例えば「太郎はスパイがいると信じている」という文は、2通りに解釈できる。太郎が、出会ったことは無いがきっとこの世界にはスパイが存在すると考えているような場合と、ある対象を念頭に置きつつ、彼／彼女がスパイだと考えている場合である。このうちどちらの信念状態を帰属させる文として信念文を解釈するのが適切かを判断するために、彼の思想が単称的か否かを考察することが役立つのである。

この単称思想概念に関しては、ラッセルとクレインがそれぞれ異なる仕方で定義を与えている。まず、記述思想と単称思想の区分を導入したラッセルや、他の多くの哲学者の考えるところでは、思想の内容は真偽評価が可能な命題であるとされる。そして記述思想と単称思想の差異も思想の内容である命題の差異であり、記述思想は内容が一般命題、単称思想は内容が単称命題であるような思想だとラッセルは考える。また、ラッセルは後述するように特定の対象を念頭に置く思考にはそもそも単称命題が必要であると考えていて、そしてこの単称命題は真偽評価が可能な命題でなければならないため、対象の实在が要請されることとなる⁽³⁾。

単称思想の成立に対象の实在を要請するラッセルに対し、クレイン (Crane, 2011) は単称思想の定義を「特定の一つの対象を指示しようとする思想」(22) とし、この思想は主体が「思考において特定の対象を指示する意図を有すること」(23) で成り立つとしている。例えば彼は19世紀の天文学者によって当時存在が信じられていた存在しない天体ヴァルカンを例にとり、「ヴァルカンは今夜空に現れるだろう」と当時の天文学者が思考する際には、たとえその思考の対象ヴァルカが実際には存在しないとしても単称思想が成り立つと主張する。なぜなら、天文学者は当の思考を行っている際に正に単一の対象ヴァルカンを念頭に置いているため、実際に対象が実在しなくとも思考において一つの対象のみを指示しようとする意図する状態が成り立っているからである。

単称思想の成立条件について、ここで既に両者には相違があることが分かる。ラッセルの定義では、単称思想は実在対象を構成要素に含む単称命題を内容にもつ思想だとされるため、実在しない対象への単称思想は成立し得ない。一方、クレインは「思想」の意味を「思想の内容」と「何かを思考しているという心的状態」に二分し、単称思想の成立に関わるのは後者の思想だとする。そのため、思想の内容が単称命題かどうかとは無関係に、主体が特定の対象を単称的に指示する意図を持って思考していれば、仮に対象が実在せずとも単称思想は成立することになる (Crane, 2011, 22-24)。両者のうち、一般的にはラッセルの定義が標準的なものとして受け入れられている。

筆者は最終的に単称思想の成立に単称命題は不要だとするクレインの定義を擁護する議論を展開することとなる。この帰結はラッセルの定義を引き継いだ立場が結局、ラッセルの単称思想の定義を保持出来ていないこと、そしてそもそも特定の対象を念頭に置いた思考それ自体はラッセルの定義に依らない形でも成り立つということから導かれる。しかしこのことを見るためには、<単称命題を内容とする思想>という標準的な単称思想の成立条件の考察から始めなければならないため、以降は主にラッセルの定義に従って議論を行い、最終的にクレインの定義を補強する議論を行うことになる。

標準的な定義において単称思想と記述思想を分けるものとされる一般命題と単称命題の区別はフレーゲとラッセルの議論に由来し、また、この議論の発端は単称名辞を含む文をどう解釈するかに関する双方の意見の相違にある。フレーゲはあらゆる名前にはその担い手が唯一的に充足する記述が結びついており、その名で示される対象への思想も、対象そのものへの直接的な思想と

はなっておらず全て記述を介した間接的なものであると主張した。このような立場は記述主義と呼ばれ、記述主義においては単称名辞が指示する対象は全て確定記述⁽⁴⁾の形の記述条件「the F」を充足する対象として、その対象が有する記述を通して間接的に主体に与えられる。よって単称名辞を含む文が表現する命題も、「Fという記述を充足する唯一つのxについて、xはGである」のような形の、直接には個体を含まない一般命題になっている。フレーゲはどの対象について思考するにも必ずこのような記述条件から成る一般命題を介す必要があると考えたのだ。

他方でラッセルはフレーゲに反し、単称名辞を含む文は記述ではなく、その名辞の指示対象を直接に構成要素として持つ命題を表現していると考え、その命題を心に抱くことによって直接的に、つまり記述条件の充足に依らない仕方を通して対象を思考することができると主張した。例えばラッセルにあっては「モンブランは4000メートル以上の山である」のような文が表現する命題は現実世界の対象モンブランそのものと4000メートルより高いという性質の順序対 \langle モンブラン、4000メートルより高い \rangle として理解される⁽⁵⁾。

このように記述でなく対象を直接構成要素に含む命題こそが \langle 単称命題 \rangle である。そしてラッセルはこの単称命題を主体が心に抱くためには \langle 見知り \rangle という要件が必要であるとした。見知りとは直接に対象を認知することにより対象と主体の間に結ばれる非言語的な知覚関係である⁽⁶⁾。ラッセルは対象との見知りを持たない場合、その対象を念頭に置いて思考しているとか知っているとはいえないとする。ラッセルがこの主張で意図していたのは以下のことである。

私は、「これこれのもの」として対象を知っているとき、その対象が「記述によって知られている」と言おう。(中略)我々は過去にその鉄仮面を被った唯一人の男が存在していたことを知っており、また彼については多くの命題が知られている。しかし、我々は彼が誰だったのかは知らない。(中略)我々は「aがこれこれのものだ」という形式の命題は何も知らないのである。

(Russell, [1917], 1951, 156)

つまり彼が言いたいのは、「これこれのもの」という確定記述を通して対象を思考する際に当の対象への見知りによる知覚的情報が欠けている場合、対象であるaそのものを念頭に置いて思考している状態とはいえないということである。ここからラッセルは、世界と主体の言語を介さない直接的な接触を通してのみ、主体は対象を真の意味で把握しその対象についての信念を抱くことができるのだとする。そして対象について単称的に思考するには、見知りによってその対象を非言語的に把握し、その個体を直接構成要素として含む単称命題を心に抱くことができるのでなければならないと考えたのである。

見知りによって得る知識を「見知りによる知識」、直接知覚関係のない対象について記述を介し把握して得る知識を「記述による知識」として分け、単称命題、ひいては単称思想を有するには前者が必要である、とするのがラッセルの単称命題及び単称思想の理論である。

単称命題の概念は \langle 直接指示の理論⁽⁷⁾ \rangle に引き継がれており、その中で重要な位置を占めるに至っている。しかしこの理論の発展によって、単称命題の構成要素に成り得る対象の範囲をラッセルの定義する範囲から拡張しようという展開が生じた。そして単称思想のラッセルの定義を擁護する論者たちも、直接指示の理論の単称命題概念の拡張に合わせて単称思想の成立条件を弱め

ようという議論を展開したのだが、このことに起因して単称思想の理解が非常に複雑となってしまうというのが現状である。これらのことを理解するために、ひとまず次節では直接指示の理論を概観することとする。

2. 直接指示の理論

ラッセルは見知り可能な対象をセンス・データと普遍者に制限していた。しかし直接指示の理論の発展によって固有名、指標詞、指示詞などの単称語が記述条件の充足という間接的な仕方ではなく、対象そのものを直接的な仕方でも指示するという説が一般性を獲得するに伴い、構成要素に記述ではなく対象そのものを含む命題である単称命題の概念が重要性を増し、見知りの要件をラッセルのそれよりも緩め、適用対象の範囲を拡張しようという考えが生じた⁽⁸⁾。

ここでは、直接指示論が主にならぬといった経緯で単称命題を要請するのかを理解するために、クリプキによる固有名理論とカプランによる指標詞理論をみることにする。

クリプキが固有名に関して様相論理を用いて示した見解によれば、「アリストテレスは犬好きだった」と「古代最後の大哲学者は犬好きだった」という2文は、現実の歴史について述べるものとして理解される限りでは真理条件が同一である。しかしアリストテレスが哲学に興味を示さずに生涯を終えた可能性も十分に考えられる。そのような反事実的状况を考慮した場合、2文の真理値は大きく異なる。アリストテレスが哲学者でなかった場合には、後者の文にアリストテレス当人は全く無関係である。他方で前者の文については、アリストテレスが哲学者でない反事実的状况でも、その状況でアリストテレス本人が犬好きかどうかでこの文の真理値は決まる。ここからクリプキは、固有名は反事実的状况で指示対象が変化する確定記述とは異なると考えた⁽⁹⁾。そして彼のこの固有名理論は、固有名を含む文が表現する命題は単称命題として理解されるべきだという主張を含意すると解釈されている⁽¹⁰⁾。

カプランも「彼」という指標詞を例にとり、これが記述では捉えることが出来ない特殊な振舞いをする主張している。主体aの右隣りにニュージャージー住まいのポール、左隣りにイリノイ住まいのチャールズが立っていると想定する。aがポールを直接指し示して「彼はニュージャージー住まいだ」と述べたとき、この文によって表現されている命題は「aの右隣りの男はニュージャージー住まいだ」のような記述が表す命題とは同一でない。なぜなら、ポールとチャールズの立ち位置が逆だったような反事実的状况を考慮しても前者の発話は真である一方、後者の記述は偽になるからである。つまり、「彼」のような指標詞を含む文は、それを記述で置き換えた文とは異なる真理値を持ちうるのである。この理由は、指標詞を含む文の命題が、構成要素として直接対象そのものを含む単称命題であり、記述と違いあらゆる真理値評価の状況で、発話時点において選出された対象が同一に保たれるためであるとされる⁽¹¹⁾。

ここから得られる教訓は、直接的な仕方でも対象を指示する言語表現は固定指示子として機能するということである。これら直接指示理論により、記述の充足により真偽が決まる一般命題では捉えられない、反事実的状况でも対象が固定的な命題が存在することが主張され、こうした対象の固定的な命題を捉えるために、記述でなく対象そのものを構成要素とする単称命題の概念の重要性が再認識されることとなるのである。

ラッセル流の定義では単称思想の成立条件は単称命題を内容とする思想を持つことであつた

が、彼の定義した単称命題概念ではセンス・データと普遍者のみが見知りの対象であるため、単称命題の構成要素となりうる対象もこれらに限られていた。したがって、ラッセルの定義を厳密に踏襲する限り、単称思想はセンス・データと普遍者という対象にしか成立しないことになる。しかしながら、直接指示の理論の示唆するところでは、ラッセルが考えるよりはるかに多くの対象が単称命題の構成要素となり得る。そしてこの理論が単称名に対する指示の理論として多くの支持を得たことに伴い、単称思想の成立対象も直接指示の理論に合わせて拡張しようという提案がなされたのである。具体的には、ラッセルの定義した単称思想概念よりも見知りの条件を拡張する理論と、見知り条件自体を廃棄しようとする理論がそれぞれ複数提案されている。前者に該当するのが言語的見知り説と因果見知り説、そして後者の見知りを不要とする理論が道具主義、認知主義、そして記述的心的ファイル説である。マートン (Martone, 2016) は見知り拡張説及び不要説の双方に重要な異議を提示しているので、次節では彼の特徴づけに倣ってそれぞれの理論を概観した上で、彼の異議を確認していくこととする。

3. 見知りの拡張説と不要説

本節では、直接指示の理論で示された単称命題概念に合わせて単称思想に関するラッセルの定義を改定し、新たな成立要件を与えようという試みから提案された諸立場を概観し、その後各立場に対するマートンの異議を確認する。その際、マートンが各立場への異議の要として依拠する〈ラッセルの動機〉を把握することが以下での議論の理解の助けとなるため、事前にこれを確認しておこう。

マートン (2016) はラッセルが単称思想の成立要件に〈見知り〉を課した当初の動機を単称思想概念は保つべきだと主張する。この動機とは、我々は世界に数多ある対象を全て同じ方法では思考できないので、対象に合わせて二つの異なる思考方法を用いる必要があるという考えである。例えばセンス・データは全く記述を介さず思考されるが、太陽系の重心のような直接知覚できない対象は記述を通してしか思考され得ない。ラッセルはこの二つの対象思考方法を明確に弁別する動機の故に「見知りによる知識」と「記述による知識」の区別を導入し、前者によってのみ成立する思想として単称思想を定義したのだとマートンは述べる。よって、ラッセルの定義を真の意味で守るなら、単称思想概念は一切記述に頼らない対象への思想でなければならないのである。そうでなければ「見知りによる知識」と「記述による知識」の差異を単称思想の弁別基準に採用できなくなってしまう、見知り概念の意義や導入の動機が保てないからだ。

これから紹介する見知り拡張説及び不要説の各立場がこの点を保てていないことをマートンは強く問題視している。このことに留意し、各立場を確認していこう。

3.1 見知りの拡張説

まずはラッセルの単称思想の定義——内容が単称命題である思想を抱くこと——を引き継ぎつつ、見知りの成立条件を弱める形で見知り対象を拡張しようとする見知り拡張説の二つの立場を確認しよう⁽¹²⁾。

3.1.1 言語的見知り説

ラッセルの定義を弱めて見知り対象を拡張しようという提案の一つが、主にバック (Bach, 1987) により支持されている立場である言語的見知り説 (Linguistic Acquaintance 説: 以下 LA 説) である。LA 説では見知りの成立条件がラッセルのものとは異なる。この説では、命名者により対象が何らかの名前で呼ばれ、その名前が言語的なコミュニケーションの連鎖を通じて別の主体に伝達されると、その主体も伝達された名前をその担い手に対して単称的に用いること——指示——ができるようになることとされる。そして、この連鎖では名前の伝達によって、命名者が最初に対象との間に持った〈知覚的な〉見知り関係までもが他者にそのまま引き継がれるとされる。つまり LA 説では、単称思想の成立には命名者が見知りを持った対象の名前が言語コミュニケーションを通じて伝達されるだけで十分である。

マートンは LA 説に対し、見知り主体と対象の間に生じた知覚関係そのものを、なぜ他者が言語コミュニケーションによって引き継げるのかという批判を提起する。LA 説では単称思想の成立にはコミュニケーション連鎖の始点にいる命名者が対象への知覚関係を有することと、その主体が対象から獲得した知覚そのものが連鎖を通じて他者に引き継がれることが必要である。仮にどちらかが成立していなければ、コミュニケーション連鎖の中にある主体は対象との見知りを獲得できないため、単称思想は成立し得ない。そして対象と見知り主体の間の知覚的關係そのものを言語を通じて他者が引き継ぐことはできない。何故なら他者から言語を介して伝達されるのは言語化された情報であり、知覚によって獲得された対象についての情報そのものではないからである。以上を根拠にマートンはこの LA 説が不当であるとする。事実 LA 説の擁護者も多くはこの欠陥から以下に挙げる因果見知り説に移行しているという⁽¹³⁾。

3.1.2 因果見知り説

見知り条件の拡張を擁護する別の立場は、バック (1987) やレカナティ (Recanati, 2012) によって提案されている因果見知り説 (Causal Acquaintance: 以下 CA 説) である⁽¹⁴⁾。CA 説では見知りは因果的起源に対する知覚的結びつきであるとされる。いわく、見知りの成立にはある対象を因果的起源とする何か (足跡など) が知覚的遭遇者によって知覚されているだけで十分であり、見知り対象そのものへの知覚は直接的、間接的を問われない。さらに、見知り対象に名づけを行った命名者とのコミュニケーション連鎖を通して主体が名前を学ぶ際に、主体は命名者によって知覚された指示対象と直接・間接を問わず因果関係が結ばれ、それによって見知りを得ることができ、この方法による見知りの獲得によっても単称思想が成立するとされる。これはコミュニケーション連鎖がそれ自体因果的な連鎖であるため、この因果的連鎖により直接的な因果関係がある場合と同様に単称思想を持つことが可能となるためであるとされる。例えばマートン (2016) が挙げている以下の事例を考えてみよう。

- 1) 雪原の中でクマの足跡を見つけ、発見者が「これは大きいぞ！」と主張した事例。
- 2) 捜査官が捜査の末、ホワイトチャペル地区の連続殺人が単一の殺人犯による犯行だと考えた事例。新聞は彼を「ジャック・ザ・リップパー」と名付け、それ以後ほかの市民もその名を彼を単称的に指示するために用いるようになった。

CA 説に基づけば、(1) では足跡の発見者は足跡への見知りからその因果的起源であるクマへの単称思想を間接的に抱いている。また、(2) では犯人が残した痕跡への見知りを基にした因果連鎖が成立していて、犯人の名前の共有を通して捜査官のみならず市民も皆、彼が誰かを知らぬまま、彼について単称的に思考できていることになる。

さて、CA 説へのマートンの批判を見よう。彼は CA 説の事例は対象の痕跡を知覚しているのみではあるが、直観的には単称思想として成立していることを認めている。では何が CA 説の問題として挙げられるかという、次の2点である。

- (A) あらゆる対象が見知り対象になってしまうという危惧
- (B) ラッセルの「記述による知識」と「見知りによる知識」の弁別基準を満たさない

ちなみに (B) は LA 説にも提起される問題である。

それぞれ確認していこう。(A) の問題は以下のように示される。CA 説が正しいとすれば、自分の携帯電話への知覚から見ず知らずのベトナムの携帯生産工場の女性のさらにその祖母に対する単称思想が成立する、などと言えることになる。しかしそうなると、単称思想が成り立たない対象はおそらく存在しなくなると考えられる。そしてもし CA 説があらゆる対象に単称思想が成り立ちうると考えることを問題でないと主張する場合、見知り不要説の立場と同化してしまうのではないかという異議がマートンによって提起されている。

(B) で提起されている問題は、見知り拡張説がラッセルの「見知りによる知識」に反する多くの事例を単称思想として認めてしまっており、そのため、この説を採ると単称思想と記述思想を区別した際の〈ラッセルの動機〉が保持できなくなるという問題である。より正確に言えば、(B) は直接に知覚を持たない対象については、それが因果的に結びついているが記述による概念化を通して対象を捉えることが必ず要請されてしまうため、「記述による知識」になってしまうという問題である。ラッセルが単称思想の定義を行った際に擁護しようとしていたのは、「a がこれこれのものである」という形式の命題を知っていると云えるのが記述を介さない直接的な見知りを持つときのみだ、という点であった。しかし LA 説では連鎖の中の主体は対象との知覚関係がないため、対象を個別化する方法は「命名者が知覚し「a」と名付けた対象」などの記述を経由したものにならざるを得ない。また、CA 説でも (1) の知覚主体はクマそのものでなく足跡のみを把握しているため、当のクマを思考するには「この足跡のクマ」などの記述による個別化が必要だろう。(B) の問題は正にこの点に関わる。見知り拡張説論者はラッセルの定義する単称思想概念を擁護することを目的としていたはずが、〈見知り〉概念を間接的な対象との関係に拡張したことで、ラッセルが最も保持したかった単称思想の事例を上手く説明できなくなっているのである。

さて、(A) (B) の評価に移る前に見知り不要説の諸立場も確認しておこう。(A) でマートンは CA 説が見知り不要説の立場と同化してしまうと述べており、この主張を正当に評価するためには見知り不要説がどういった立場であるかを事前に把握する必要があるからだ。

3.2 見知り不要説

見知り不要説は、単称思想の成立要件に見知りを課さず、確定記述を用いた方法で単称思想が

成立すると主張する立場である。この立場のヴァリエントを以下、順次紹介していく。

3.2.1 道具主義

見知り不要説の一つである道具主義はカプラン (Kaplan, 1989) の提唱する立場である。この立場は単称思想の成立に見知りは不要であり、確定記述を利用した直接指示のメカニズムのみで十分だと主張する。例えば、「22世紀に最初に生まれた子供を「ニューマン1」と名付ける」といった指示を固定する確定記述によって固有名を規定的に創出、あるいは「世界最小のスパイ」のような確定記述を「現実の」といったパラメーターを追加して反事実的状况でも指示対象が変わらない直接指示表現に変換することのみで単称思想は成立するとされる。つまりこの立場によれば、対象への固定的な指示を成立させるための言語的な道具立てを用いることができさえすれば単称思想の成立には十分なのである。加えて、こうした最小限の直接指示のメカニズムさえ知っていれば、思考主体がどのような知識、経験、感情的状態を有しているかとも全く関係なく、単称思想が成立する。つまり道具主義によれば、単称思想の成立に対象との〈見知り〉は全く必要無く、確定記述を利用して単称命題を作り出しさえすれば任意の対象に対する単称思想が形成可能である。

道具主義に対するマートンの異議は見知り不要説全てに同様に当てはまるものなので、見知り不要説への異議はヴァリエントを紹介した後、まとめて扱うこととする。

3.2.2 認知主義

ジェシオン (Jeshion, 2002) は、単称思想の形成のために見知りは必要ないという道具主義の考え、さらに確定記述を利用する道具主義的道具立てが単称思想の形成に重要であることを認める一方で、それだけでは単称思想は成立せず、確定記述の使用主体がその個体を心的に個別化する必要と意図を有するときにそれを利用することで初めて単称思想になると主張し、この自身の立場を認知主義と呼んでいる。さらに重要なのは、道具主義と異なり、指示対象が存在しない事例でも単称思想が成り立つという考えをジェシオンが有している点である。つまり、認知主義が提示する単称思想の定義は単称命題に依拠しないものとなっている。むしろこの立場は単称思想に関するクレインの定義を支持するものと見るべきである⁽¹⁵⁾。

3.2.3 記述的心的ファイル説

記述的心的ファイル説はカミング (Cumming, 2014) が提唱する立場である。彼は単称思想の成立条件として、クレイン的定義——主体が思考において唯一的な対象を指示しようとする意図している状態——を重視しており⁽¹⁶⁾、この状態がどのような場合に成り立つと言えるかを、以下の事例を基に考察している。

- 3) スミスとジョーンズという名の2人の死体がシカゴの別の場所で発見された。Onesky と Twosky の2人の刑事が知らせを受け調査した結果、2遺体は殺人の被害者であるという結論に達する。ただし、Onesky はスミスを殺した犯人とジョーンズを殺した犯人が同一犯であると考えているが、他方の Twosky はそれぞれの殺人には異なる犯人がいると考えている。しかし2人の刑事は知らないが、実際には2遺体は事故死であり、殺人犯は存在

しない。

この(3)では指示される対象は実際には存在しない。だが、2人の信念は同じ対象に関するものであると言える。Twoskyは2人の殺人犯説を支持しているため、ジョーンズ殺人犯がスミスを殺したとは考えていないが、他方で彼はスミスを殺した男として自身が思考している対象とOneskyが思考している対象は同じであると言うだろう。何故なら、同じ対象についての話をしていると彼らが同意しないとしたら、スミスの殺人犯はジョーンズをも殺したのだろうか、という問いを立て2人の刑事が議論を行うことすら不可能だからである。ここからカミングはこうした信念が「思考対象(thought object)」に関わっていると主張する⁽¹⁷⁾。そして思考対象が実際には存在しない場合でも、対象への思想が形成されうると彼は考える。つまり、彼は思考対象を念頭に置いてさえいれば、それは対象についての思想と呼ぶに十分だと考えているということである。しかし、この思考対象を心的に個別化し、またその思考対象への思考が単称思想として成立するためには、「記述的心的ファイル」という概念装置が必要であるとされる。

心的ファイルは、もとはレカナティ(2012)の提唱した概念で、彼によれば主体は見聞きした対象への情報をまとめて保存するファイルのようなものを各対象それぞれに対して心的に構築するのであり、そのファイルを参照することで個々の対象を思考することができる。このファイルが心的ファイルである。他方の記述的心的ファイルは通常の心的ファイルとファイルの構築方法が異なり⁽¹⁸⁾、主体が任意の確定記述を想定し、この記述を「規定条件(rubric condition)」として満たす対象を思考しようとするだけで良いとされる。例えば「スミスを殺した犯人」を規定条件とする対象を思考しようとするれば、それだけでスミスの殺人犯-ファイルを心的に構築できる。そしてこのファイルの構築に伴い、ファイルに対応する思考対象が心的に個別化されるのである。また、ファイルは「27cmの靴を履いている」などの「付随的な条件(non-rubric condition)」を持つこともできるとされる。

さて、以下の2文を考えてみよう。

- 4) Oneskyは誰か(someone)がジョーンズを殺したと考えている。
- 5) Oneskyがジョーンズを殺したと考えているような特定のxがいる。

(4)は特定の誰かではなく、ただジョーンズを殺した何者かがいると考えている事例だと言える。他方の(5)はクレイン的定義に基づく単称思想が成立している状態である。Oneskyが念頭に置いている思考対象が、規定条件「ジョーンズを殺した犯人」のみを持つファイルに対応している際には(4)は成立するが、(5)の信念状態の成立には十分でない。なぜならその場合Oneskyはまだ、誰であれジョーンズを殺した犯人はジョーンズを殺した、とトリヴィアルに考えているだけだからである。しかしOneskyが、既存の思考対象——例えば「スミス殺人犯」を規定条件とする対象——が「ジョーンズを殺した」という別の記述を付随的条件として満たすと考慮している場合には(5)が成立していると言える。以上のように、カミングは思考対象が規定条件のみを持つファイルに対応している状態をhyper attributiveと呼び、記述思想を有する事例に相当するものと考えていて、これに付随的条件の考察が加わる際に初めてその思想は単称思想に変わると述べている⁽¹⁹⁾。無論、(5)の対象は実在しないので、単称命題は成立しておらず、よっ

て彼が依拠する単称思想の定義はラッセルのものではなく、クレインに類するものである。

記述的心的ファイル説の hyper attributive な仕方のファイル構築は、そのまま見知り不要説全般における確定記述を用いた単称思想構築メカニズムの理解に役立つ。無論、相違はあり、単称命題と無関係に単称思想が成り立つと考える認知主義・記述的心的ファイル説と違い、道具主義では「実際の」のような演算子を用いて確定記述を単称命題に変換しているため、単称思想の成立要件に単称命題が必要である点は保たれている。しかし重要なのは知覚関係を持たない対象を記述を用いて同定し思考する仕組みを見知り不要説が共通して用いている、という点である。

マートンが見知り不要説への異議を提示するのもこの点に対してである。見知り不要説では主体と対象との知覚関係が一切存在しないうえ、完全に記述に基づく対象同定を行っているので〈ラッセルの動機〉が保たれておらず、これを単称思想と認めるべきではないと彼は主張する。つまりここでも (B) の異議が指摘されている訳である。

以上で各立場の確認を終えたので、次節では本節で示されたマートンの異議の具体的な考察を行う。

4. 見知り拡張説及び不要説に対するマートンの異議の検討

本節では見知り拡張説及び不要説に対するマートンの (A) (B) の異議を検討する。

マートンは CA 説が、見知り不要説のようなラディカルな考え——確定記述を利用することで主体が全く見知り関係を持たない対象にまで単称思想が成立する——を認めないにも関わらず、実際見知り不要説との違いが判明でないと主張していた ((A) の異議)。この2説の境界が不明瞭となる事態は CA 説で提示される、見知りが直接的な知覚を持たない対象にも成り立つという考えから生じる。この考えを認めた場合、対象の实在の有無や対象の外見的特徴が見知り不要説と同様 CA 説でも判明でなくなるのである。例えば、(1) の足跡は実はそもそも足跡でなく、クマは存在しないかもしれない。そうすると対象の实在が判明でない場合 CA 説は何をもって間接的見知りが存在すると言えるのか。また、どちらの立場においても主体は対象の外見的特徴を知覚的に把握していないため、対象を思考するために記述の助けを借りている。そのため両者の違いは結局不明瞭な程度差問題となってしまうのではないかと、というのがこの問題の本質である。これをもってマートンは CA 説と見知り不要説に実質的相違がないことを見るのである。

確かにこの点には不明瞭さが残るが、これをもってこれら立場が本質的に同一のものであると考えることはできない。何故なら筆者の考えるところでは、CA 説には見知り不要説では扱えない、特殊な単称思想の形成が可能だという利点があるからである。つまりマートンの (A) の異議は成立しないのである。

CA 説のような間接的見知りに基づく単称思想概念の見知り不要説に対する利点は、ストローソン (Strawson, 1959) の「指示的同定」という見知りの変種ととれる概念を考慮することで理解できる⁽²⁰⁾。指示的同定は知覚によって対象を別の諸対象から区別することであるとされ、我々が言語や思考において対象を同定し、指示する基礎をなすと彼は考える。

彼は指示的同定が記述による同定と根本的に異なることを示すために、重複宇宙という概念装置を用いる。二つの地域にそれぞれ全く同一の質の集合が全く同一のパターンで分配されている一つの宇宙としてこれは定義される。重複宇宙に住むサリーが、目の前にいるビルのシャツにつ

いた染みについて思考しているとしよう。質的に同一な全く別の場所にいるサリー*がやはり同様にビル*のシャツについての染みについて思考している。ビルとビル*は双方質的充足条件は同一であるが、にも関わらずサリーが思考している対象は直観的には明らかにビルである。彼はここから、記述的同定によっては区別できない対象の区別が指示的同定にあっては成り立つと考える。

さらにストローソンは記述的同定も、究極的には指示的同定に基礎づけられていると主張する。このことはサリーがビルの母親について思考する状況を考えてみると明らかとなる。サリーはビルの母親への知覚的關係を持っていないため、記述によって同定が行われる。しかしながら、満たされるべき記述は「ビルの母親」であって、「ビル*の母親」ではない。記述条件自体が、先んじて指示的同定によって与えられた対象に紐づけられているからである。

以上から分かるようにCA説は根本的な部分で、知覚に基づいてのみ成り立つこのようなある種の対象との関係を必要としているのである。他方で、道具主義は全くそのような制約を課されない理論であるため、マーソンの見立てに反し双方の理論は異なるものである。そして何よりも見知り不要説では今見たストローソンの重複宇宙事例においてビルとビル*の区別ができないのである。何故ならビルとビル*の記述的充足条件は定義により同一であり、ゆえに、記述条件を基にどちらか一方への思考を行うことはできないからである。他方でCA説の場合、知覚者は指示的同定に基づく記述的同定を行っている。そして因果連鎖の中にある主体も、自身は対象との知覚的紐づけを持たないため記述知識のみから単称思想を構築しているが、因果的に対象と結ばれることで知覚者(サリー)と同一の単称思想を構築できるのである。この因果的に対象と結ばれる、という点には説明が必要であろう。因果のコミュニケーション連鎖では、連鎖の中の主体は自らは指示対象の区別ができないが、「最初の知覚主体が指示的同定によって紐づけた対象」という記述を満たす対象を指示、思考しようと意図することで、思考対象としてビルを選び出せるのである。

以上から、間接的見知りを要請する単称思想概念では任意の対象に見知りが成立する訳ではなく、見知り不要説のような記述のみに頼った単称思想では解決できない問題を処理できることが判明となった。つまりこの二つの単称思想は区別されねばならず、(A)の異議は妥当でないのだ。しかし忘れてはならないのは、元々ラッセルが保持したかった記述に依らない単称思想の事例自体は、見知り拡張説も見知り不要説も扱えないという点である((B)の異議)。

これらを踏まえて筆者は、クレインの定義を単称思想全体の定義に採用したうえで、単称思想を成立要件やその機能が異なる3種類のものとして分けるべきだと主張したい。一つは完全に記述に基づく単称思想であり、単称命題が思想の内容であることも必要としない、ミニマルな成立条件の単称思想である。二つ目は間接的な見知りを有する際に成立する単称思想であり、記述に基づく対象の個別化は許容されるが、追加条件として単称命題の成立を必要とする単称思想である。最後は直接的な対象との見知りを持つ主体のみが心に抱くことのできる、単称命題と「見知りによる知識」の双方を必要条件とする単称思想である。この3種類の単称思想は今述べた順に上から下に行くにつれ追加条件が厳しくなっている。これらを分けることで、単称思想概念の批判者がどの条件を批判しているのか、また擁護者がどこまで厳しい条件を求めているのかが明瞭となるため、この3区分は各論者の立場の整理に有益である。さらに、クレインの定義を採用し、単称思想を3種類に分けることで以下のように(B)の問題を斥けることができる。

(B) は見知り拡張説及び不要説がどれも記述に頼らないことを要求する「見知りによる知識」の条件を満たしていないという問題であった。そしてこの条件が重要である理由は、当初ラッセルが擁護したかった単称思想概念、すなわち「aがこれこれである」という命題を真に知っている際にのみ成り立つ思想を弁別するために「見知りによる知識」が必須だからである。マートンは対象の認知が記述に依存するか否かという線引きが消えてしまうと、ラッセルの「記述による知識」と「見知りによる知識」という区別が成立しなくなり、＜ラッセルの動機＞が保てないと主張する。そして仮にこの区別が無くなってしまうと、何を基準にして単称思想と記述思想を分けるのが不明になるため、彼はこの区別は必ず保たれねばならないとする。

確かに(B)は見知り拡張説と不要説の双方に当てはまる。見知り拡張説が見知りの伝達プロセスと考えるコミュニケーション連鎖では、主体の対象への思考は記述を媒介する形で行われているうえ、対象の姿を主体は把握できていない。これでは「見知りによる知識」に基づいているとは言えない。この点は無論、そもそも見知りを単称思想の要件に課さず、さらには記述によって対象を同定する見知り不要説にも当てはまる。しかしながらクレインの定義を単称思想の成立条件として採用する場合、これら立場を単称思想概念として適格なもの認めたとうえで、(B)を斥けられるのだ。

クレインの定義では単称思想の成立に必要なのは思考において特定の対象を念頭に置き単称的に指示しようとする、こと、であった。そしてこの条件は見知り拡張説と不要説の双方でしっかりと成立している。例えば(1)で主体は思考においてクマを単称的に指示しようとしているし、また、(3)についても Onesky が事件の犯人について特定の単一の対象を心的に個別化し、それを念頭に置いて思考していると仮定しない別の説明を与えることは困難であろう。Onesky がジョーンズの遺体発見現場で見つかったナイフを見て、「スミスの殺人犯」を規定条件とする思考対象を念頭に置き、「奴がジョーンズ殺害時に落とした物に違いない」と考える際にこれを特定の単一対象への思考ではないとすると、それがどのような思考となるのか全く判明でない。また、これら立場はラッセルの考えに反し、記述に頼る事例や対象が実在しない事例でも対象への単称的な思考が成り立つことを例証してもいる。

以上から分かるように、クレインの定義を採用すれば見知り拡張説及び不要説を単称思想概念を説明するものとして認めることができる。ラッセルは単一の対象を念頭に置いて思考していると言える状態とは単称命題を心に抱いていることであると考えたために、極端に制約的な概念として単称思想を定義してしまっているが、単称的に対象を思考するためにはクレインの定義を満たすことで十分なのである。逆にラッセルの定義にこだわると、明らかに単称的に対象を思考している事例を上手く説明できなくなるのだ。

しかしクレインの定義を採用することでなぜ(B)の異議が斥けられるのだろうか。まず、(B)の異議を基に見知り拡張説及び不要説を単称思想概念として不適格と見做す一つの根拠は、マートンが単称思想と記述思想を区分するために「見知りによる知識」と「記述による知識」の区別が不可欠だと考えているためである。しかし、クレインの定義を採用する場合には、単称思想と記述思想を分ける別の基準として＜対象を単称的に指示しようとする思想になっているか否か＞を設けることができるので、対象への思想が「見知りによる知識」に依拠しているかは関係ない。そのため、「見知りによる知識」に基づく単称思想概念となっていないという(B)の異議は、クレインの定義を採用した場合には見知り拡張説及び不要説双方の単称思想概念に対する直接の

批判にはならないのである。

しかしながら、マートンの主張に反し、クレインの定義を単称思想概念全体の定義として採用しても「見知りによる知識」と「記述による知識」という区別が消えて＜ラッセルの動機＞が保持できない、ということはない。何故なら、単称思想の全体の定義は記述に頼らない対象同定や単称命題を内容とする思想といった条件を課さないものとなるが、より限定的な事例でこれら条件（ラッセルの定義）を採用できるからである。例えば「aがこれこれのものである」と対象の知覚的特徴を思い浮かべながら単称的に思考するには、まさにラッセルが定義したように直接の見知りを有し、単称命題を心に抱く必要があるため、彼の課す条件を満たすことが不可欠である。他方で、以上のような思考を行う際に主体は当然aを心的に個別化し単称的に指示しようという意図を持っていると考えられる。つまりラッセルの定義を満たす単称思想はクレインの定義も同時に満足しているものであり、二つの定義は必ずしも排他的ではないのである。よって、クレインの定義をミニマルな成立条件として満足しつつ、さらに厳しいラッセルの定義をも満たした際に成り立つより限定的な単称思想概念を別に認めることで、「見知りによる知識」に基づくことという条件は保存できるのである。

つまり単称思想と記述思想の弁別条件としてはクレインの定義を置きつつ、別種の単称思想を成立させるより厳しい条件として「見知りによる知識」に依拠すること、を課すことで＜ラッセルの動機＞を満たす単称思想も認めることができるのだ。

以上でマートンの(A)(B)の異議が十分なものでないことが確認された。最終第5節ではこれまで扱った見知り拡張説及び見知り不要説を比較考量しながら、単称思想の定義として最適な条件は何かを整理、確認する。

5. 単称思想の最終的定義

まず、これまでに見てきた見知り拡張説及び見知り不要説を整理しよう。LA説はそもそも主体の持つ見知り関係がそのまま他者に引き継がれるという前提を置いていたために、成立しがたいものであることが主張されていた。LA説は指示の保存については一定の支持があるものの、見知りに関する理論としては採用できない。

CA説は間接的な見知りを単称思想の成立要件としていた。そして直観的には対象への単称的な思考が成立している事例を説明できるうえ、見知り不要説の持たない特有の利点も有している。因果の伝達のプロセスもストローソンの指示的同定に基づく記述的同定が話者間で繋がっていくと考えればよく理解できる。

見知り不要説のうち、道具主義は確定記述を用いて内容が単称命題である表現を作り出せさえすれば単称思想は成立するというラディカルな見解である。しかし、この立場は認知主義によって批判されている。

認知主義は直接指示の道具立てを用いれば見知り無しでも単称思想は成立すると考える点で道具主義と等しいが、思考主体が対象を単称的に指示する必要性、目的、意図を持たねばならないと考える。これがなぜ必要とされるかは、(5)に関する記述的心的ファイルの事例で示されたのと同じ理由である。「誰であれジョーンズを殺した男」がジョーンズを殺したと考えるだけでは、特定の対象を単称的に念頭に置き思考しているとは言えないのである。つまり道具主義のように

ただ単称命題を成立させたからといって、単称思想が成立するとは限らないということである。さらに認知主義は、そもそも対象が実在せず単称命題が成り立ちえない事例でも単称思想が成立しうると述べるという特徴がある。

記述的心的ファイル説は見知り不要説を採っている。確定記述によって思考対象を心的に個別化し、その思考対象が別の付随的条件を満たすかどうかといった考察を行う際に単称思想が成立すると考える。また、この立場は単称思想の対象が実在物である必要は無いとする。例えば (3) で見たように実はスミスが事故死であったということは容易に想像可能だが、その場合でも思考対象は存在しており、単称思想はこの思考対象への思考によっても成立するのである。実はこの立場は実質、認知主義と同一の立場である。確定記述によって対象を選び出し、その対象を単称的に意図を持って思考しようとしており、さらには認知主義同様この立場も、対象の不在の事例でも単称思想が成り立つことを認めるためである。

つまり、ここまでのところ見知り拡張説、不要説双方のうち単称思想の定義・成立条件を与えるうえで有益でありうる候補は、CA 説と記述的心的ファイル説（認知主義）である。このうちどちらをより本質的なものとして採用するべきだろうか。筆者はクレインの定義である「特定の単一の対象を指示しようとしている思想」を基礎とすべきだと主張した。この定義を満たすために必要なミニマルな条件をより明確に示しているのは記述的心的ファイル説（認知主義）である。何故なら、記述的心的ファイル説ではクレインの定義同様、単称思想の成立に対象の実在が不要だとされるのに対し、CA 説ではクレインの定義に加え単称命題の成立——つまり対象の実在——が条件として余分に課されるためである。

さて、クレインの定義に基づくミニマルな成立条件を示す記述的心的ファイル説（認知主義）によると単称思想は最終的にどのようなものとなるのだろうか。それはラッセルの定義とは大幅に異なり、対象を確定記述を経由して思考することを許し、見知りを必要とせず、対象が実在することも要請しない。ただし主体が対象を心的に個別化する意図と必要性がある時にのみ成立する。

そして CA 説のような間接的見知りを有する事例や、ラッセルの擁護しようとした主体が直接見知りを持つ事例で成立する単称思想はさらに追加の限定条件が課されたものと捉えるのである。

具体的に言うと、CA 説では必ず 1 人、対象の痕跡を知覚する主体が必要となる。そして知覚主体が指示的同定に基づいて単称思想を形成しているため、思想内容は単称命題でなければならない。しかし記述を用いて対象を思考することは許されている。

ラッセル的単称思想は、記述に依らず直接対象を知覚することでしか成り立たず、また、内容が単称命題である思想を有する必要がある。

このように単称思想を 3 種類に分けることで、各単称思想が持つ利点を保てる。例えば記述的心的ファイル説のようなミニマルな条件の単称思想概念ではその成立に単称命題が不要なため非存在対象への単称思想の成立を認めることができる。逆に CA 説では間接的見知りに基づく単称命題の成立が追加条件に課されることにより、見知り不要説では扱えない重複宇宙事例を扱える。さらにラッセル的単称思想は「見知りによる知識」を追加条件とするため〈ラッセルの動機〉を保つことができる。しかしこれらは 3 種類に分かれつつも、どれもミニマルな成立条件を満たす一つの単称思想概念の中での下位分類なので、全て〈単称思想〉として括ることができる。

以上三つが本稿で新たに主張された単称思想の区分となる。そして付随的条件の考察や単称的に指示しようとする意図を持たずに行われる hyper attributive な心的ファイルの構築が記述思想の事例である。この際、単称思想と記述思想の間を区分するのは、思考対象を心的に個別化したうえで別の条件についての思考を行うかどうかということになる。

参考文献

- Bach, K. (1987). *Thought and Reference*. Oxford: Oxford University Press.
- Crane, T. (2011). "I - The Singularity of Singular Thought". *Proceedings of the Aristotelian Society Supplementary Volume* 85, 21-43.
- Cumming, S. (2014). "Indefinites and Intentional Identity", *Philosophical Studies* 168 (2), 371-395.
- Fitch, Greg and Nelson, Michael, "Singular Propositions", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2016 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL =<<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/propositions-singular/>>.
- Hawthorne, J., & Manley, D. (2012). *The Reference Book*. Oxford: Oxford University Press.
- Jeshion, R. (2002). "Acquaintanceless de re Belief", In J. Campbell (Eds.), *Meaning and Truth: Investigations in Philosophical Semantics*. New York: Seven Bridges Press, 53-78.
- (ed.) (2010). *New Essays on Singular Thought*. New York: Oxford University Press.
- Kaplan, D. (1989). "Afterthoughts", In J. Almog (Eds.), *Themes from Kaplan*. Oxford: Oxford University Press, 565-614.
- Martone, F. (2016). "Singular Reference Without Singular Thought", *Manuscrito*, 39 (1), 33-60.
- Palmira, M. (2017). "Towards a Pluralist Theory of Singular Thought", *Synthese*. 10.1007/s11229-017-1401-4.
- Recanati, F. (2012). *Mental Files*. Oxford: Clarendon Press.
- Russell, B. (1917). "Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description", In *Mysticism and Logic*. London: George Allen & Unwin Ltd. Reprinted in: Russell. (1951), *Mysticism and logic, and other essays*, Totowa, New Jersey: Barnes & Noble Books, 152-167.
- Strawson, P. (1959). *Individuals: An Essay in Descriptive Metaphysics*. London: Methuen.
- 飯田隆 (1987) 『言語哲学大全 I 論理と言語』 勁草書房.
- 野本和幸 (2014) 『現代の論理的意味論 フレーゲからクリプキまで』 岩波書店.

注

- (1) <思想 (thought)> は、思考と互換的に用いられ、また、「x は p を信じる」のような命題的態度を含むものとしても用いられる語である。
- (2) この区別については Jeshion (2010) に従った。また、彼女によれば、記述思想は de dicto 思想、単称思想は de re 思想などとも呼ばれる。
- (3) ラッセルは有意義な文には対応する存在者が必須だとし、文が表現する命題はそうした存在者を構成要素に持つとする (飯田、1987、154)。よって、存在しないものについて述べる文は意味を持たず真偽が問えないのであり、そもそも命題を表現し得ないことになる。
- (4) 確定記述は一つの個体のみを指示する言語表現であり、例えば「月面を最初に歩いた人」がこれにあたる。
- (5) ラッセルは後に意見を変え、単称命題の構成要素となり得る単称名辞は「これ」のような表現のみだとし

- た（飯田、1987）。
- (6) ただし、ラッセルにとって見知り可能な対象はセンス・データと普遍者に限られる（Fitch and Nelson, 2016）。我々がトマトを知覚する際には精神に赤く丸いトマトの像が形成されるとされ、この像がセンス・データであるとされる。彼は見知りの成立には見知り対象を誤同定することがあってはならないと考えた。外的対象には誤同定の可能性があるため、ラッセルは見知り対象をこれらに限定した。
 - (7) 「直接指示の理論」はクリプキ、カプラン、ドネランらにより発展した、記述に依らない指示の理論や、また単称命題を擁護する反フレーゲ的な立場を指して用いられる（Jeshion, 2010）。
 - (8) 直接指示の理論の発展に伴う単称命題の重要性の復権に関する詳しい過程は Jeshion (2010) を参照のこと。
 - (9) 以上の議論は『言語哲学大全 I』（212-214）を参照した。
 - (10) 野本（野本、2014、323-324）を参照せよ。
 - (11) 以上の議論は Fitch and Nelson（2016）を参照した。
 - (12) 見知り拡張説の2立場の呼称は Martone（2016）によるものである。
 - (13) Martone（2016, 42）を参照のこと。
 - (14) バックは単称思想を説明する理論の候補として CA 説を提案しつつも、自身は LA 説を支持している。
 - (15) パルミラもクレインとジェシオンが単称思想概念の成立条件に同一の基準を設けていると Palmira（2017）において指摘している。
 - (16) カミングは Hawthorne and Manley（2012）の道具主義的な単称思想概念に基づく不確定名詞の考察と自らの議論の類似性を指摘しつつ（Cumming, 2014, 注22）、また他方で、後述するように道具主義的道具立てのみでは単称思想の成立に不十分だとして認知主義的な成立条件を示唆していることから、クレインの定義を重視していると考えられる。
 - (17) カミングは「思考対象」を談話指示対象のようなもので、実際の指示とは独立に形成され、文脈などの要素によって異なる話者間に共有されうる抽象的な対象とみなしている。
 - (18) Recanati（2012）の心的ファイルは対象との直接的な見知り関係、あるいは共同体内の因果連鎖を基にした見知りが無ければ構築できないものとされる。
 - (19) カミング自身は de dicto と de re の思考の差異としてこの議論を展開しているが、注（2）で示した通り、単称思想と記述思想はそれぞれ de re 思想、de dicto 思想とも呼ばれる同一概念として扱われるため、ここでは区別せずに扱った。
 - (20) 以下のストローソンの議論については Fitch and Nelson（2016）を参照した。

[査読を含む審査を経て、2018年5月17日掲載決定]
（一橋大学大学院社会学研究科修士課程）